

俳諧文学に現れた日蓮聖人

上 田 本 昌

一

日本文学として全く独特なものに「俳諧」がある。これは我が国に生れ、栄えたものであって、小説や随筆等その他の文学が、明治以後の外国文学に影響され、大きな展開をとげたのに較べて見ると、これは純粹に日本独自の短詩文学と云うべきものであろう。俳諧と云う語が始めて見えるのは、古今集の中に「俳諧歌」とあるのを以って初めてであるとされている。

俳諧とは、五七五の定型詩である「俳句」を中心として、この俳句をとり入れて書かれた「俳文」や、「紀行文」、それに俳句に関する評論を取扱った「俳論」等の分野にわかれるのであるが、やはり中心となる俳句に最も大きなウエイトがかけられていることは、云うまでもなからう。そこで俳句と云う言葉についてであるが、これは古来「発句」とよばれて、「連歌」という長詩型の第一番目に詠む句という意味から、発句の語が生れたのであるとされている。即ち、連歌の最初の一句を発句と称していたのが本来の意味であり、発句に始り長句（五七五）と短句（七七）とを交互に付け加え、最後は「挙句」又は「結句」で結びとするのである。しかし、連歌を作ることの一方に於て、発句だけ詠むと云うこともおこなわれ、連歌の型式は衰えても発句の方は盛んとなり、やがて芭蕉の出た元禄時代に入

ると、発句だけが単独で詠まれる傾向が強くなり、また蕪村や一茶の天明時代になると連歌型式の俳諧が盛んにおこなわれたが、此の頃にはすでに「連句」と云う名称が生れていたようである。更に降って明治以後に於ては、連句が衰退し、もっぱら発句のみが作られるように移り変っていった。従って、連句の中の発句と云う型ではなくなり、一句として独立したものとなった為に、発句という言葉は自然にその存在が薄れ、これに代って俳句と言われるようになって行つたのである。俳句という言葉が最初に使われたのは、明和の頃、或いは元禄時代にすでにあつたとの説もあるが、然し、一般には明治二十年代に正岡子規が、俳句革新運動を起してより以来のことであるとされている。

俳諧の起りについては、古来より山崎宗鑑をもって、その祖としているようであるが、俳諧の性質からして室町時代の後期に生れた飯尾宗祇にまでさかのぼるべきであるとする説も出されている。これは俳諧が連歌との関連に於て生れた点からして、当然考えられてしかるべきものと云えよう。彼は連歌の第一人者として知られ、漂泊の詩人とも称されている。彼よりやゝ遅れて室町時代の末期に、現れた山崎宗鑑^②により、俳諧はようやく庶民のものとして、広く知られるようになって行つたようである。宗祇の頃は正式な連歌を型通りに守つて来たのであるが、宗鑑はこれにむしろ反撥を感じ、謂ば異族文学的な連歌に対して、庶民文学としての俳諧を開拓して行つたものとみなしうるのである。また彼は単に俳諧を起したと云うだけに留まらず、その俳諧に「滑稽味」を盛り込むため、懸詞や縁語を豊富にとり入れ、俳諧の一特性を成した点でも極めて注目しと云える。古来、俳諧を連歌より独立させた点で、彼を俳諧の魁としている。

また宗鑑とは同じ頃に出た荒木田守武は、最初連歌を学んだが、後に俳諧に転じ、宗鑑の影響を受けて更に俳諧の質的向上を図り、宗鑑の「滑稽味」に加えて、内容に「品位」を持たせることに努力して行つたのであるが、やゝ保

守的存在であつたようである。此の守武の後に、江戸時代に入ると松永貞徳がこれに代つて大いに俳諧を鼓吹して行つた。彼はこれを専業として、慶長二年八月に俳諧宗匠の免許をえてをり、俳壇に於ける初の宗匠を得た人として知られている。貞徳の俳諧は宗鑑・守武を継承したものであるが、優美性をもつた処に特徴があるとされている。即ち、たんなる「おかし」或いは「笑い」ではなく、優しいものを求める心が働いていたのである。^⑤

次に、江戸時代は町人階級の發達した時代だと云われている如く、俳壇の上にも町人の進出が目覚ましくなり、大阪を中心とする町人衆を相手に、西山宗因が「談林派」^⑥を起し、貞徳の京都上方を中心とする優美さに対して、宗因は浪花はあつて自由豁達な詠法を特色として發達したのである。談林からは井原西鶴・池西言水らが出て、一時盛んとなったが、後に観念的な奇想に走りすぎたため、独善的となり難解なものとなつて次第に薄れて行つた。然し、貞門と談林との間には、しばし論争もおこなわれ、俳壇は江戸時代に入って一段と隆昌して行つたのであるが、そうした気運の中に上島鬼貫が出て「伊丹派」^⑦を創し、従来の洒落的な俳諧を、純然たる美文学の域に高めて行つた。後に出た芭蕉も彼の影響を受けたものとされている。鬼貫の作風は自然脱俗であり、談林派のような作為が見られず、平易にして格調のあるところが特長とされているのである。池田秋旻氏の『日本俳諧史』によれば彼をして「文学的俳句の第一声を掲げたるもの」^⑧とみなしている程であるが、門下に此の伊丹派を継ぐ者が不幸にしてなく、鬼貫とは同時代に出た松尾芭蕉により、俳壇は全く統一された形となつて、芭蕉とその一門により俳諧は従来の域を脱し、文学として大成して行つたものと云えるのである。

元禄時代の文学は、芭蕉・西鶴・近松によって代表されている、と云われている如く、此の頃の俳壇は、芭蕉^⑨によって風靡され、新しい段階に入ってしまったと云うことが出来るであろう。芭蕉の俳風は「わび」又は「さび」と呼ばれている如く、閑寂幽玄であつて、「もののあわれ」に一脈通ずるものがあるのではなからうかと思える。彼は造化に順応して造化に帰一することを根本とし、「高く心を悟りて俗に帰るべし。」（赤冊子）と云う態度で、従来の滑稽俳諧を止揚し、更に彼独自の俳諧文学を確立して行ったものと見ることが出来るのである。俳句を中心として、紀行文や俳論等を著し、その門下からは江戸時代に於ける著名な俳人だけでも十指に余る程輩出し、その俳壇に於ける功績は顕著なものとされているのである。正岡子規によれば、「俳諧と云う語は滑稽の意なりと解釈する人多し、……されど、芭蕉已後の俳諧は、幽玄高尚なるものありて、必ずしも滑稽の意を含まず。」と述べている。^⑩

そこで本論では、一応此の芭蕉を「俳諧文学」と称されるジャンルの初に置いて、所論の目標とする日蓮聖人についての觀察を試みようとするのである。芭蕉が出て活躍した当時のわが宗門は、幕府の仏教保護政策とあいまって、学徳清廉な人材が多数集り、安定した隆昌時代を迎えていたのである。即ち、武家や公家等の有力な外護者をえて、身延を始め宗門各地の寺院が増築・建立され、また関東や関西方面には人材養成のための檀林が増設され、宗義も盛んとなつて行った。又一方では寛永及び万治寛文年間の不受不施問題が起り、社会的にも大きな反響を呼んでいた時代に、ほゞ相当するのである。これに加えて教団が庶民と極めて密接な關係を保っていたため、こうした宗門の祖師や行事が、当時の俳壇に何等かの形で反映して行ったであろうことは、当然考えられて来るのである。

芭蕉の俳句で日蓮聖人に関連したものと云えば、すぐに思い出させられるのに、

と云うのがある。此の句はあまりにも有名であるが、「御命講」（又は御影講）と云うのは、即ち「御会式」のことであり、旧暦十月十三日に池上で宗祖が入滅せられた御聖日を指すのであって、古来、歳時記の中では、また「日蓮忌」とも称し、十月の季語中では最も一般に知られているもの、一つである。高浜虚子編の「季寄せ」^①によれば、御命講の項が次の如く解説されている。

十月十三日は日蓮の寂滅した日である。東京池上本門寺はその終焉の地で、御命講の最も盛んな地である。「萬灯」と称へて造花で飾り立てた行灯を押し立て、団扇太鼓を叩き、妙号を唱へて行く信者が絡釈として続く。地方では一月おくれや陰暦のまゝ行はれている所もある。

爰で考えられるのは、芭蕉の頃すでに「御命講」と云う言葉が、俳句の上で「季語」として一般に認められていたと云う事実である。これはその当時の民間に於て、御命講と云う行事が、広く知れわたっていたことを物語るものであって、庶民の文学と云われる俳諧の中に、宗祖入滅の聖日やその行事が、取扱われるようになったのは、庶民のための宗教と云われる聖人の宗旨からみて、むしろ当然なこととも考えられるのであるが、又一つには、当時の日蓮教団が積極的な布教を行い、庶民の間で相当に強い関心をもたれていたであろうことが推論される。と云うのは俳句は「季語」と五七五の「定型詩」と云う二つの重要な特長を備えたものであるが、此の中の季語については、特に「行事」に関する季語はそれ相当の一般性をもっていないなくてはならないとされていたからである。即ち、一部の地方で極くわずかな人々しか知らないような行事であっては、季語として一般に認められ難いことである。此の点からみても御命講の行事は、当時広く知られており、特に庶民の間で盛んに行われていたであろうことが、その頃の人々によっ

て詠まれた句の上から察せられるのである。

そこで右に挙げた芭蕉の「御命講」の句についてであるが、この句が最初に入集したのは、元禄九年に門人史邦の編集した『芭蕉庵小文庫』であつて、此の句が作られるに至つた経緯については、芭蕉の歿後に、同じく門人の森川許六が志多野坡と手紙で俳論を斗わせたことがあつたが、その手紙の一節に、

芭蕉翁の雑談の折に、日蓮の御書に「新麦一斗、筍三本、油のやうな酒五升一南無妙法蓮華経と回向いたし候」というのがあると話されたので、自分は、さらば「御命講」の句はそれから取られたのか、……（風俗文選）

とあることからみても判る如く、芭蕉が宗祖の書いた御書に、よく目を通していたことが知れる。然し、此の『風俗文選』に載っている「日蓮の御書」と称する一文については、これと全く同一の文章をもつた御書がなく、現行の『昭和定本・日蓮聖人御書全集』の中にも見当らない。これは恐らくその当時、この一文、或いはこれに類する一文が「日蓮の御書」として存在し珍重されていたではなからうか、と思える。^⑫現在、身延山花之坊の入口附近に、此の句碑が建てられてあるが、すっかり古びて文字もはっきり読みとれない位である。その正面はに御命講の句がござまれ、右側には、

此 山 の 志 げ り や 妙 の 一 字 よ り 蓼 太

とござまれてある。蓼太と云うのは蕉門服部嵐雪の門下で、姓は大島、雪中庵三世を継いだ人である。また句碑の左側は、

法 華 経 と の ミ 山 彦 も 鳥 の 音 も 完 来

と云う句が記されている。一つの句碑の三面にそれ／＼一句ずつ三人の句がぼられており、裏面には、

と建立の年時が示されてある。従つて身延山の此の句碑は蕉翁歿後、一八三年たつてから建てられたことがわかる。此の句碑は、琴太の句から俳号をとつた地元俳人たる一字庵梅も里が建立したものと伝えられている。尚、蕉翁が身延へ参詣したかどうかについては、現在これを証する資料が一つも発見されていないようであり、俳諧研究家の間でも、恐らく此の句は池上の御命講に因るのではないかとされている。翁はこの句のほかにも、

菊 鶏 頭 切 り つ く し た る 御 命 講

芭蕉

と云う句を遺しているが、これは元禄五年の「忘れ梅」に収められているものであり、前の句と比較してみたとき、「酒五升」の句が「日蓮の御書」をより所として作られたのに対し、「菊鶏頭」の句は、旧曆十月の庭に残り咲く草花を切り尽して、御命講の供華としたと云う、状景描写によつて一句が構成されている。一読の上からすれば、むしろ前者よりも後者の方が、芭蕉の句の特徴と云われている「さび」のきいた句のようにも思えるのである。

三

芭蕉の頃から現在に至るまで、宗祖に關係した季語として、俳句界に公認されているものは、此の「御命講」が唯一のものであるが、これに關連して、後に「萬灯」が季語として認められ、更に「御命講」の別称として「日蓮忌」及び「お会式」が季語として登場して來ている。或いは又「万灯」との關連に於て、「御命講花」と云う季語も使用されているようである。此の御命講花と云うのは、篤信の檀家から、細く削つた竹に小さい白や紅の造花をつけたものを奉納し、参拝者が一本宛貰つて來て、仏壇に挿す習慣となつてゐる。

元来、俳句の中には仏教に関連した季語が相当数取り入れられている。その主たるものを挙げてみると、

正月……初詣。初法話。寒修行。初葉師。

二月……追儺。初午。涅槃会。

三月……御水取。彼岸。開扉。

四月……灌仏会。十三詣。御影供。法然忌。壬生念仏。御身拭。

五月……安居。夏書。

七月……御来迎。閻魔詣。

八月……盂蘭盆(旧曆)。施餓鬼。解夏。六斎念仏。地藏盆。

九月……秋彼岸。遊行忌。

十月……御命講。達磨忌。

十一月……御取越。十夜。冬安居。親鸞忌

十二月……臘八会。大師講。札納。除夜の鐘。

これらが大体代表的な季語と云える。別称等附随季語を入れると、その数はもっと増えることになるが、右に掲げたのが一般に知られているもの、主たる季語であり、日蓮宗関係としては、前記の御命講が直接関係をもった唯一の季語と云える。「寒垢離」と云うのもあるが、これは寒中の水行を指し、必ずしも本宗に限られているわけではない。

そこで次に、御命講に関する句について、芭蕉以外の俳人につき、その代表的なものを拾って行ってみよう。元禄時代は主として蕉門の勢力が俳壇を支配していたのであるが、森川許六もその門人で芭翁晩年の弟子であったが、彼

の作に、

精心の多き大工や御影講 許六

と云うのがある。これは信心深い大工職人が一心に万灯でも造っている状況を、述べたものと見ることが出来る。或いは寺普請をしている大工と見ることが出来るが、前者の方がむしろ自然であるように思える。また、もう一句許六の作に、

御影講や巖いわの青き新比丘尼 許六

と云う句があるが、これはそりたての青い頭をふりたてながら、新発地の尼僧が忙しそうに御命講の準備などしている状況が窺れる。許六は元彦根の藩士であり、不遜にして虚勢を張った態度から、俳壇に益する処は極めて稀れである、との批判も一部に於て起っていたようであるが、前述の如く彼も又「日蓮の御書」に目を通し、宗祖に少なからず関心をもっていたであろうことは、右の二句からしても背けるであろう。

次に、天明時代以降の俳人について、その代表的なものを拾ってみると、享和元年版の『葎亭句集』冬の部に、

御影講やさ、はりなしの松が崎 葎亭

と云うのがある。此の句の△さ、▽とは、恐らくは酒のことを指すものであり、芭蕉の「油のような酒」の句を、ふまえているのではないかとも思える。作者の葎亭と云うのは、蕉門早野巴人はのの門下で、三宅崎山みやまきのことであるから、蕉翁の句が念頭にあったであろうことは想像に難くない。△はりなし▽の△はり▽は、構え設けると云う意味を持っているので、酒の準備のされていないことを表しているのではないかと思う。また松が崎と云うのは、当時洛北に於て栄えた松が崎榎林①のことではなからうかとも思える。佐渡にも松が崎があるが、句の感じから洛北を指しているよ

うであり、檀林では平素禁酒の制が施かれていたようなので、「さゝはりなし」即ち檀林の御命講には、酒の用意がしてないことの意と解し得よう。また古語で「ささはり」と云う語は、「ささはり」は接頭語であり、「ささはり」は妨げ、故障、の意を表す言葉とされてをり、支障なく無事に御命講の済んだと云うことを掛け合せた「懸詞」として用いられているのではないかと考えられる。これに就いては、同じ葎亭の句に、

か た ま り し 普 哉 餅 や 御 影 講 葎 亭

と云うのがあるが、これと比較してみたとき、酒の代りに普哉餅を用いた御影講と云うことにもなる。「普哉餅」は「じざいもち」とも「しるこ餅」ともいい、関西方面では専ら普哉餅と呼んでいるようである。寛永十五年西武撰の『鷹筑波集』には内海長衛門久重の「よきかなや影もぜんざいもち月夜」と云う句が見え、^⑮『鹿苑日録』には慶長十二年正月四日の項に、普哉餅の名が出てゐる処から、江戸時代の初期には、既にこれが用いられていたことがわかる。次に、山口素堂の門として知られてゐる溝口素丸の句に、

下 戸 な ら ぬ 餅 も 咲 き け り 御 命 講 素 丸

の句がある。これは彼の門人絢堂が寛政八年に編集した『素丸発句集』冬の部に収められている。「餅も咲きけり」とは、当時より御命講にはよく餅を搗いて供えたことがわかる。これは現在でも御会式に餅を供える慣しが続いているが、所によっては、「餅花」と称して木の枝に餅だんごを飾り、これを供える風習もある。新しい処では、高浜虚

紅 白 の 餅 の 柱 や お 命 講 虚 子

と云うのがあるが、現在この句の如く、「餅柱」を供える処もあるのである。尚、この餅については、元禄十一年の

『俳諧猿舞師』(種文撰)の中に、

お 命 講 に 上 戸 も 餅 の 一 座 哉 汶 江

と云うのが見えており、御会式に集った一同僧俗に、餅がふるまわれたことがわかる。上戸も下戸も御会式の餅を、或いは関西などでは喜設じることとして、食べ会う会式のこといとなつていたようである。また紫丸発句集には、

冬 枯 の 世 を 花 に す る 会 式 哉 紫 丸

か れ て 行 く 人 目 を 紅 に 会 式 口 同

との二句がある。何れもお会式の「萬灯」を指しているものと思える。特に最初の一句は菊鷄頭その他の草花が枯れ尽した初冬の世に、紙の造花を紅に染めて飾りたてた万灯をかざして、会式の行事をおこなう様子が、たくみに表現されている。此等の俳句から受ける感じは、当時のお命講が相当な賑いをもったものとして、盛んとなっており、宗祖滅後すでに五百余年を経ておる処から、御会式が「お祭」化して来ているように見受けられるのである。尚、萬灯については、虚子の『新歳時記』に、

瓔 珞 の 紙 の さ く ら や お 命 講 蓬 文

萬 灯 の 花 真 白 に 浮 み け り 雨 徑

等の句も見られている。

次に天明俳壇の名家と呼ばれている与謝蕪村⁽¹⁶⁾についてみると、御命講に関する句には次の一句が挙げられる。

御 影 講 の 蓮 や こ が ね の 作 り 花 蕪 村

この句には、「伝灯の光をかゝげて、古里虹が三十三回の遠忌をとぶらふに申つかはず。」と云う前書が付けられている。此の句は天明二年の作であるが、前書との関係から云って贈呈句であることがわかる。蕪村については詳しく論ずるまでもなからうが、芭蕉と比較すると、極めて対象的な作風をもっていたことが知れる。芭蕉は水墨の世界、即ち静的であり、蕪村は色彩の世界、即ち動的である。枯淡ときらびやか、と云う風な特長があったと云える。此の句にもそうした蕪村の作風が現れているようにもみえよう。御影講花に「こがねの造花」として蓮をこしらえたと言ふあたり、一つには回忌のための追悼句としての意味もあろうが、やはり一種のきらびやかさを窺うことが出来る。又、此の時代の有名な俳人、一茶は、浄土念仏関係の句が多く、宗祖に関する句はほとんどみられない。

天明俳壇に於て、蕪村と共に名家として並び称せられるのが炭太祇である。彼は主として人事句にすぐれてその才を發揮している。彼の没後、門弟らによって『太祇句選』が編集され、明和九年に出されている。その中に、

御 命 講 の 華 の あ る じ や 女 形 太 祇

と云う一句がある。「女形」とは芝居役者の女役を云うのであつて、この頃は庶民の娯楽として芝居・浄瑠璃等が盛んとなつて來つた時代であり、豪華な万灯の主が花形の女役者であつたと云うあたりに、此の句を通して、御命講即ち日蓮聖人が、どのような形で庶民の生活に溶け込んで行つていたかを知ることが出来るのである。大工職人から酒好きの町人、善哉好みの関西人、更には芝居の役者、等あらゆる階層にわたつて、素朴ながら心のこもつた御命講の行事が、次第に宗祖を慕う気持ちの高まりと相いまって、会式行事がやがて盛大な祭りのような賑やかさを加え、江戸時代の庶民にとって、忘れることの出来ない年中の主要行事と化して行つたと考えられてくるのである。又此の太祇の句と句柄の上で通ずるものに、先きに出た『素丸発句集』中に、

と云うのがある。太祇の句にある「女形」をじかに表現したような感じのする句としてみたとき、興味深いものがあらう。

次に、同じく御命講を扱った句でも、少々形を変えた句を拾ってみると、元禄六年に山本荷兮かげいによって撰出された『曠野後集あらかしご』第六、釈教の部に、△日蓮忌▽と云う前書があつて、

あ ら さ む の 仏 さ ま か な 十 三 日 傘 下

と云う句がある。当時は勿論旧曆であつたから、寒さが身に沁む頃であり、滑稽味を充分に持たせた作として面白い。

上 人 の 鼻 に 箔 お け 御 命 講 史 邦

これは前出の『芭蕉庵小文庫』編者史邦の作であるが、此の句も又滑稽味にあふれていると云えよう。恐らくは上人像の顔の一部に金箔がはげている処が現れ、たま／＼作者が参列した御命講で、それが眼に止つたのであらうか。

元禄八年、浪化上人撰の『有磯海ありそうみ』に、「小倉山常寂寺にて」と云う前書があつて、

御 命 講 や あ と の 月 に は 月 の 友 荒 雀

と云うのが出ている。これは前書にある通り、現在京都市右京区嵯峨小倉山町にある常寂光寺での作であり、「小倉山」と云う月の名所としての名に合せて、御命講に集つた信徒らが、その後、月の宴を張って語り合っている團樂を詠つたものと思える。又一つには日蓮忌の後、月見の宴を催すと云う、趣向がこらされていたのかも知れない。

かくして江戸時代に於ける俳壇の内から、主たるものを挙げ、御命講に関連した句を見て来たのであるが、次に明治以後の俳壇に就いて目を向けてみると、正岡子規⑧が中心人物として大きく浮び上つて来る。彼は近代俳句の父と云つ

てもよい存在であり、江戸時代末期の「月並」や「陳腐」に墮した俳句を、正道に導き、俳諧の復興につとめ、文学としての地位を与えたのであって、その功績は高く評価されている。明治廿八年の『寒山落木』巻四には、

日の人　や　法師　居　並　ぶ　御　命　講　　子規
佐渡へ行く舟　呼び　も　ど　せ　御　命　講　　同

の二句が載っている。第一句の「日の人」とは、日蓮聖人或いはその教団を指してをり、第二句目の「佐渡へ行く舟呼びもどせ」は、日蓮聖人の佐渡流罪をふまえての句と思える。「日の人」或いは「呼びもどせ」と云う表現の中には、宗祖に対する子規の深い関心がこめられているように思える。此の点については、又後に詳述するが、宗祖の伝記・宗義にも少なからず目を通していたことが知られるのである。もう一句、

御　命　講　の　花　か　つ　ぎ　行　く　夕　日　哉　　子規

と云うのがあるが、これは明治三十一年の作で、恐らくは本門寺辺の万灯が、夕日に映えつつ行く状景をとらえたものと思われる。

次に、子規の門でその道を継承し『ホトトギス』を主宰した高浜虚子の編による『季寄せ』^⑩には、前出した芭蕉の「油のやうな酒五升」の句の外に、

十　ば　か　り　柿　も　樹　に　お　く　会　式　か　な　　蒼　虬
お　命　講　か　ゝ　は　り　な　し　や　余　所　の　寺　　青　畝
万　灯　の　中　を　万　灯　ゆ　き　に　け　り　　白　草　居

の三句が収められている。第一句と第二句は地方に於ける寺院のお会式を詠い、第三句は池上の如く大寺に打ち寄せ

る万灯の波を句にしたものと思える。また次に、高木蒼梧編の『新修歳事記』には、次の五句が載せられている。

弱	き	心	法	鼓	勵	ま	す	御	命	講	珀	雲
法	力	に	秋	晴	顔	や	太	鼓	衆	極	浦	
お	命	講	や	立	ち	居	つ	拜	む	二	法	師
佐	波	ケ	島	の	貧	乏	村	や	日	蓮	忌	鼓
鯨	突	く	漁	夫	も	參	り	ぬ	御	命	講	碧
												明

此の中、一句と二句は共に万灯の行列につく会式太鼓を指してをり、さながら弱き心を勵まし、法力を盛り上げるが如くに響く法鼓で、無信心の者が見聞しても、勇壯濶達な氣持を湧かせるだけの力をもっていたであらう。これらの方句になると、最早や「御命講」と云う言葉の持つ感じよりは、むしろ「御会式」或いは「万灯行列」と云う言葉の方が、あてはまるような、謂はば祭り化されたものとして、近代庶民の間に滲透して行ったように思えて来るのである。四句目は、宗祖在島三年に及ぶ佐渡ヶ島に於ける日蓮忌であるが、孤島の貧乏村に於てさえも、尚かつ流罪の身として渡った土地で、御命講がたとえさ、やかなものであったにせよ、営まれていると云う処に、此の句を通して聖人の偉大さを味うことが出来る。最後の五句目は、漁村に於ける御会式風景であるが、「鯨突く」と云う言葉からは勇々しさ、何物をも恐れぬ丈夫さ、が感じられる。これは「日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ、旃陀羅（漁者）が家より出たり。」と述べて、漁夫の子として生れたことを少しも意に介せず、むしろ誇りにさえ思っておられた宗祖が、法華経のため敢然として如何なる迫害にも折れず、勇壯に立ち向って行かれたその勇姿に通ずるものがある。又これについては、先の正岡子規に「日蓮讚」と云う前書のもと、

鯨 つ く 漁 夫 と も な り て 坊 主 哉 子 規

と云う句がある。明治卅五年の作であるが、漁夫の家から出て沙門となり、世を救い困を助けようと献身された処に、深い感銘を持ったのであらう。句の上からすれば、「漁夫」と「坊主」の二語を対応させて、ユーモラスにまためてあるとも見られるが、前書の「日蓮讃」と云う点からみたととき、そうした表現上の問題よりも、むしろその内容を取るべきであると思う。

四

御命講に関する句を中心として見て来たのであるが、次に、御命講以外の句で日蓮聖人に関する代表的な作品を拾って見よう。

先ず寛永十五年の『鷹筑波』に、「妙満寺成就院にて」と云う前書があり、

日 蓮 の 御 光 か 月 も 十 三 夜 西 武

と云うのが見られる。何れの地に在る妙満寺を指しているかは不詳であるが、聖人の御威光を、暗夜の照す十三夜の月明に譬えているものと、察せられるのであり、「如日月光明」の聖徳を表しているともみられる。また天和三年の其角撰による『虚栗』には、

日 蓮 よ 梢 に 蟬 の 鳴 く 時 は 其 角

と云う句が載っている。此の句には「一品の宿坊にて」と云う前書が付けられているが、一品と云うのは人名であり、恐らくは其角の門人あたりではなかったらうかと思える。又その宿坊について、何れの地を指しているかは判然

としていないが、句の中の蟬は法師蟬と解してみたとき、興味深いものが感じられるであろう。「日蓮よ」と云う語法の面からも、聖人に対して身近かなものを、作者自身が持っていたであろうことが示される。荷今の『曠野集』巻八には、「鎌倉の安国論寺にて」と云う前書があつて、

た　う　と　さ　の　涙　や　直　に　水　る　ら　ん　　越　人

との句が見られる。元禄二年に編まれたものであるが、「立正安国」を強調された聖人をしのんでの作である。此の句から思い出されるのは、「鳥と虫は鳴けどもなみだをちず、日蓮はなかねどもなみだひまなし。此のなみだ世間の事には非ず。但だ偏に法華経の故也。」と云われた祖文である。下五の「水るらん」には、世俗の涙と違った入轍しさVを象徴しているものがあるようにも感じられるであろう。次に、『芭蕉庵小文庫』には、「真間寺楓」と云う前書があつて、

日　蓮　の　哥　に　も　み　へ　ず　若　楓　　史　邦

と云うのがある。真間とは千葉県市川の弘法寺を指しているのではなからうかと思える。初夏の寺院にみずくしい若楓がもえいでて居り、聖人もこうした風景を目にされたことであらうが、歌に残っていないのは不思議だと考えたのであろうか。「哥にもみへず」と云うあたり、作者史邦は芭蕉と同様に聖人の御書を相当広く見ていたのではないかと思ふ。

享保年間越人によって撰せられた『庭篋集』によると、「日蓮上人念仏無間諸宗無得道との建立。首を切^ツ太刀折^レ梅^ニ降^ル星」との前書があつて、

梅　に　降　る　星　や　袈　裟　掛　け　松　の　徳　　水　尺

の一句がある。厚木妙純寺での作と思えるが、竜口法難の直後、聖人はこの「星降り」にあっておられる。その時の状況は『種々御振舞御書』に詳しいが、明星天子の梅の枝にかゝりたるさまを、袈裟掛けの松と対照させて、一句を構成させているところに、聖人の徳を讃えようとする作者の意が汲みとれる。聖人の生涯に於て竜口法難は、極めて重大な意義をもった事件であつたので、これを取り扱った短歌・俳句の数は、また相当数にのぼると思えるが、中でも代表的なのは蕪村の句がある。

い な づ ま や 二 打 三 打 鋺 沢 蕪村

これは明和七年八月の作で、鎌倉で「稲妻」と云う題のもとで作られた中の一つである。二打三打は又別の書によると「二折三折」となっているのもあり、共に聖人が斬罪に処せられようとしたとき、その太刀取の太刀が、普門品所説の如く「刀尋段々壊」となったことを表現したものであって、巧みなものと云える。尚、「鋺沢」について、相模国足柄郡にその地名があるが、これでは鎌倉から離れ過ぎてしまい、竜口法難とも無関係となってしまうが、恐らくは竜口を指した縁語ではなからうかと思える。

次に、安永六年版の『蓼太句集』によれば「身延七面山にて」と云う前書のもと、

榑 の 火 や 祖 師 の 胡 座 も 眼 の あ たり 蓼太

の句が見受けられる。蓼太については先述の如くであるが、身延はもとより七面山へも歩をのびたことがこれで知れる。また七面信仰が当時盛んになっていたであらうことも推測されよう。や、時代が下って寛政十年版の『哲阿弥句藻』には、少々趣を異にした句が見られる。

芭 蕉 忌 や 南 無 妙 俳 諧 蓮 華 経 哲阿弥

作者の哲阿弥は又北齊とも号し、宗因の俳風を慕った人である。蕉翁が「日蓮の御書」に詳しく、法華の信仰をもつていたであろうことから、このようなユーモラスの句を考えついたものと思える。芭蕉忌は元禄七年十月十二日（陰曆）で、別に「時雨忌」とも云われている。大阪で彼の「奥の細道」の長途にわたる旅が終った後、五十一才の生涯を閉じたのであるが、十月十二日の忌日は、恰も御命講の速夜に相当して居り、このような点にも右の句が生れるに至った一因が存しているのではなからうか。またこの作者にはもう一句、

日蓮の御へらず口や后の月 哲阿弥

と云う、これも又面白い作が見られる。普通「へらず口」と云うと「にくまれぐち」或いは「負けおしみ」等の意味を持った語として使用されているが、（他家の徒からすれば、「日蓮のへらず口」と云うように解している者も、少なくないであらうが）こゝでは必ずしもそうした悪意を表したものととしてではなく、「御へらず口や」と云う点からみて、前句同様に諧謔な句としてみるべきであらう。「后の月」とは陰曆九月十三日の月のことであり、「十三夜」とも呼ばれて、この日は竜口法難会の翌日に相当している。聖人は「九月十三日の夜なれば月大いにはれてありしに、夜中に大庭に立ち出でて月に向ひ奉りて、自我偶少々み奉り、諸宗の勝劣、法華経の文あら／＼中して、抑も今の月天は法華経の御座に列りまします名月天子ぞかし。云云」^②と月天子の守護を要請している。

次に明治以後近代に入ると、代表的な俳人に正岡子規があるが、明治二十九年の『栗山落木』巻五には、「日蓮宗四箇格言」と標して、

念 仏 は 海 鼠 真 言 は 鯁 に こ そ 子 規

が見える。「念仏無間」を海鼠にたとえ、「真言亡国」を鯁にたとえたあたり、滑稽であるが当を得ているとも云え

よう。海鼠・鯢ともに冬十二月の季題である。同じく明治三十五年の作に、

日蓮の骨の辛さや唐辛子子規

と云う句があるが、諸宗を折伏し、破邪顕正を勇々しく実践された聖人の骨のあるところを、このように叙したのであらう。事実聖人は幕府の悪政に妥協しようとする甘さや、異教徒らによって加えられた迫害に屈しようとする弱さは、微塵もなく、その強力な主張を貫き通した面を、びりっとした唐辛子の辛味によって表現しているものとみられる。聖人の勇壮な一面、比類なき「法華経の行者」としての性格を表した句として、興味深いものがある。子規の後をついで近代の俳句界に大きな影響を与えたのが、高浜虚子である。彼は俳壇の巨匠と称され、俳誌「ホトトギス」を通じて、客観写生の立場から「花鳥諷詠」及び「実相観入」を主張し、純粹に俳句本来の立場を守った。

日蓮の法の花咲く南瓜かな虚子

この句はかつて「ホトトギス」誌上で取上げられ、一会員から「日蓮聖人の八法の花√ならへのはちす√で、蓮の花であるべきように思える。妙法蓮華経に説いた一乗の因果を、蓮華に譬えたと聞いているが——」と云う問に対し、俳諧研究家の真下喜太郎氏は、南瓜の花より蓮の花が至当と云うのは、理屈の上からすれば尤もであるが、しかし蓮の花としたら、当り前の事を当り前に云っている面白味がないと評し、更にそれではなぜ南瓜の花としたかと云う理由について、南瓜の花は元來花としては必ずしも珍貴なものではない、むしろ何処であっても見ることのできる一般性を持ったもので、蓮華が君子を表すのに対してこれは庶民的なものであると云える。言わば聖人が一生を熱烈な伝道に努力した不屈の精神、剛毅、忍耐、等により庶民に法を弘めたところに、通じるものがあるのではないかと述べている。作者虚子の住んでいた鎌倉には聖人の靈蹟も多く、正法に依って国家社会を危機から救い、それに

よって個人の安心を得せしめようと、言うべきことを言い、為すべきことを為して、幕府や他宗の僧侶からの威圧に堪えていたところを、南瓜の花と云う表現を借りて叙したものであろう。『虚子俳話』^②の中で、「俳諧から生れ出た俳句。俳句は平俗の詩である。俳句は日常の詩である。」と述べ、更に「南無妙法蓮華経は愚夫愚婦に對する日常の救ひの声である。(敢て愚夫愚婦に限らず)乃至日常の存問が即ち俳句である。心感ずる処、神通ずる処。そこに俳句がある。平俗の人が平俗の大衆に向つての存問が即ち俳句である。」と論じている。

虚子の所論をまともてみると、花鳥諷詠の写生は、結局「実相觀入」に帰着するのであつて、日常の存問、平俗の詩と云われる俳句は、即ち言い表していることは単純であり、極めて少ない言葉の詩ではあるが、その中に深い心が藏されてをり、花鳥を通して実相の世界に入つてゆく所に句の妙味があるとするのであつて、こゝに彼の俳句理念があると云えよう。五七五の十七文字の中に自然と人生の諸法実相を諷詠してゆこうとするのであり、恰も聖人が一切の仏法を單純化し具象化して妙法五字となし、しかもその五字の中に深奥なる法門を含蓄して、平明を受持することにより、難解難入な一切の仏法を受持するのと同一体であると言かれたのと、一脈相い通ずるものがあることを感じられる。芭蕉を始めとして、俳諧思想の中にはこうした「句道仏心」の流れが、大きな位地をしめているものとして考へられて來るのである。

五

俳諧文学の流れは庶民と共にあり、大衆の中にあつて榮えて來たのである。日蓮聖人の宗教もまた庶民救済の教えとして、大衆の中に浸透して行つた。この文学と宗教は、大衆社会と云う共同地盤の上で、發展して來たのであるか

ら、両者間の交渉関係は当然考えられて来るのであるが、特に聖人を通して法華經の教理・所説の法門が、江戸時代以降の俳人によって、俳句の中にとり入れられて来たことは事実である。これらの句については、その作品を挙げて解説すべきであるが、爰では一応これを略して、後の機会にゆずることとし、専ら日蓮聖人一人にしぼって、俳諧の中に現れた姿の一端を観察して来たのである。

如上の俳句作品から云えることは、聖人を扱った句の中で、最も数の多いのは「御命講」に関するものが圧倒的であり、これは季題として俳壇に公認されていると云う点もあって当然と云うべきであるが、聖人関係の季語が唯一であると云う点では、他宗のそれと比較したとき、やゝ寂寥の感がしないでもない。又もう一つには檀信徒を中心とする在家者の句が多く、出家者の中から聖人を詠った句を作る者が、極く稀れにしかなかったと云うことも、或いは季語を唯一にした遠因になっているのではないかと考えられる。和歌では深草の元政が大いに活躍し、歌集も遺されているが、俳諧の方では惜しくもこれに類する俳僧の出現がみられていない。

然し、一般の俳人間では、上掲の句のほかにも、相当数の作品がみられ、特に檀信徒間では好んで聖人の句を詠み、近世には御会式等に句会を催して、その盛会さが伝えられている。「御命講」に続いては、御法難会・辻説法等の句、更に聖人の破邪顕正による布教、不屈剛毅な精神等が詠まれている。「法華經の行者日蓮」を象徴する句や、「人間日蓮」としての一面を描いた作品、更に祖書や經典の上から叙した句、等に興味深いものも数多くあるが、本稿では紙数の関係で如上の代表的な作品のみにとどめることとした。(文部省科学研究費による研究成果の一部)

〔註〕

① 「俳諧文学」(浪本蕉一著) 参考

② 山崎宗鑑(一、四六五〜一、五五三) 俗称支那弥三郎、足利義尚將軍に仕えた武士、後に摂津の尼ヶ崎に

③ 退き、山崎に住んで宗鑑と号した。一休和尚について参禅したと伝えられている。

④ 荒木田守武(一、四七三)一、五四九)伊勢神宮神官。

⑤ 松永貞徳(一、五七二)一、六五三)京都の人。

⑥ 寛文二年の『玉くしげ』(是誰著)には「貞徳老人の俳諧は、やさしきを俳として、おかしきを用とす。正風俳を根さしとして、狂言を花とす。」とある。

⑦ 西山宗因(一、六〇五)一、六八二)明暦二年(一、六五六)大阪天満宮の境内に向栄庵を結び、初めて談林の旗を掲げた。

⑧ 上島鬼貫(一、六六一)一、七三八)伊丹に生れ、酒造と針医を業とした。

⑨ 「日本俳諧史」(池田秋曼著)一一〇頁

⑩ 松尾芭蕉(一、六四四)一、六九四)伊賀上野に生れ、藤堂家に仕官して宗房と名乗ったが、主君没後浪人して俳諧に身を投じ、「野ざらし紀行」「奥の細道」等を著し、蕉風の俳諧を確立した。

⑪ 「子規全集」第四卷八頁

⑫ 「季寄せ」(高浜虚子編)三省堂刊、三二九頁

⑬ 御命講の句については、「ホトトギス」(昭和廿八年十一月一日発行)の拙稿を参照されたい。

⑭ 森川許六(一、六五七)一、七一五)江州彦根の藩士、五老井とも号した。

⑮ 松崎檀林、天正八年(一、五八〇)教蔵院日生が洛北松ヶ崎に開いた関西根本檀林。

⑯ 「日本俳書大系」十三卷二一五頁

⑰ 与謝蕪村(一、七二七)一、七八三)摂津国東成郡毛馬村に生れ。本姓谷口、天明俳壇の首領と云われた。炭太祇(一、七〇九)一、七七一)蕪村と共に天明俳壇屈指の俳人として知られている。江戸の人、不夜庵とも云う。

⑱ 正岡子規(一、八六七)一、九〇二)伊予松山に生れ、東京根岸に住す。元禄の芭蕉、天明の蕪村と共に、明治の子規として古今俳傑の三子に推されている。近代俳句の父とも呼ばれる。

⑲ 高浜虚子(一、八七四)一、九五九)本名清、四国松山に生れ、子規の門に入る。柳原極堂によって創刊された「ホトトギス」を主宰し、新傾向運動に対した。現代俳句の巨匠と称されている。

⑳ 「佐渡御書」定六一四頁

㉑ 「諸法実相鈔」定七二八頁

㉒ 「種々御振舞御書」定九六九頁

㉓ 「虚子俳話」(高浜虚子著)二二二頁